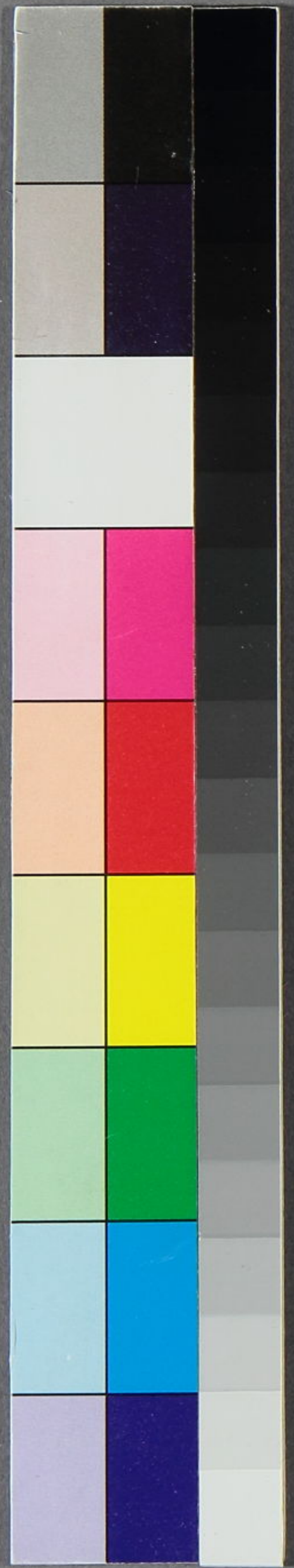


八代集抄

中裁林上下巻

三十一

特別
イ 4
3163
104(36)



貴
14
3163
104(36)



煙くつと吹つ
心明く萩乃繁
月もまゝかりて秋
の氣あまふ心こ
ろはちふ乃萩乃も
秋乃れと月乃と
やうもふねも月
のまゝあふれね
をを本并より萩
乃せれ萩乃も

千載和歌集卷之四

秋并上

秋並目より萩乃

侍従乃乃

煙くつと吹つ
萩の繁月れまきりける
秋乃

二果は萩乃

何さちふ乃萩乃
めもいさやうり
百首乃萩乃
時萩乃



秋とわと風もほろろと
 なるものありと花もさき
 なる
 秋とわと風もほろろと
 なるものありと花もさき
 なる

菅原月經

小春より春を待つに
 塵やさるる
 心より見ゆるのちりや

孝莊告新と云ふをよめる

法
官
靜
賢

少翁通靈子

新まねと風もはなそくふさふさ
おをあめりて花とまきる

類不知

法人

いりちれいとうをわさる枯風
きこふさねしんのちやうや

子
四

和泉式部
人もろんせんせもろんせと花うら
けゆくふひのりく——のこえ
若原伊家
秋山乃ちもとをこけるうくと雲ハ
すうのち秋乃ちりのちさるわらわ
若原もろん——
みやまきのち秋や男鹿乃ちあらん
つたてき——よりいふのちさる

和泉式部

蘇原伊家

卷原

子やまの、萩や男鹿乃嘉らん
 花さきくよりこゑのこさるゝ

長覺法師

就補子
何家利

萩の苑さきしどわ
 鹿の走りるあけ萩
 い鹿のはまきとく
 こころをいふまゐる
 心鳴るや
 露をけきあけあ
 萩原をわきし海
 或は一夜のしん
 朗詠 志部 紀勢
 同得園中 養子 施
 請君許折一枝春
 とはさくもあは
 せしあはれし人
 いせのきこみけ
 とはいまもや

こころをいふまゐる
 萩りうつるい散りこころ
 堀川院乃所時百首乃并
 時をわきりる 大綱
 露をけきあけあ
 いせのきこみけ
 法隆寺入道前太政大臣乃家
 昔の萩原といふ心
 前中納言雅兼金葉集

萩原

萩原さきしどわ
 心鳴るや
 いせのきこみけ
 とはいまもや
 萩りうつるい散りこころ
 堀川院乃所時百首乃并
 時をわきりる 大綱
 露をけきあけあ
 いせのきこみけ
 法隆寺入道前太政大臣乃家
 昔の萩原といふ心

こころをいふまゐる
 萩りうつるい散りこころ
 堀川院乃所時百首乃并
 時をわきりる 大綱
 露をけきあけあ
 いせのきこみけ
 法隆寺入道前太政大臣乃家
 昔の萩原といふ心

夕されともやうな
野徳より野方
る也やうまけを
りやう野方や
わけつゝやうと云
るは徳方やと云
る方字を味と
さつてアと云
さまぐにやうと云
るは
秋まれの宿ふと云
野の宿ふと云れ
て野をすとのや
うな日をすとの宿
うりて宿のやうと云

「徳方」
と云ふ
夕されともやうな
りやうをさくわけはうと云
堀河院乃所時百首寄なり
時とある
源後頼朝
さまぐにやうと云る
なりと云く
野宿ふと云る
秋まれの宿ふと云る
のうらけぬれするなりと云

百首

のわきす。野方
野分八月はく暴
風と云ふ百と云
るはさめれ
世の國者必裏の理
感されぬれは
夕されいのこれ秋凡
た今より源後頼朝
成文のやうに
十年いんと後
より秋のやうな
あはれと云ふ
りとはやうな
と云ふは
りとはやうな

百首寄なり。時秋
り
のわきす。野方
ころあまの人
夕されいの秋風
うはあまなり
源後頼朝
りとはやうな
りとはやうな
りとはやうな

寄つたてつとも
つゝもあつた
春の野に宿離は
かゝつたつとも
今一とわつた
思野野に宿離は
かゝつたつとも
今一とわつた
思野野に宿離は
かゝつたつとも
今一とわつた

秋乃野へも成りつとも
思野花とつとも
今一とわつた
思野花とつとも
今一とわつた
思野花とつとも
今一とわつた

藤原伊家

新設前右大臣

前大僧正覺忠
惠通公子
聖護院

一〇

博つたつとも
つゝもあつた
春の野に宿離は
かゝつたつとも
今一とわつた
思野野に宿離は
かゝつたつとも
今一とわつた
思野野に宿離は
かゝつたつとも
今一とわつた

秋乃月さねのそり
思野花とつとも
今一とわつた
思野花とつとも
今一とわつた
思野花とつとも
今一とわつた

推大納言實家

新設前右大臣

夢さすもあらわぬ

こころなりやあき
心明く木根に花を
吹落すふりきく
の葉の風をもあに
つるも月わたり
更級山乃多き
てわたり月の
あきと風す
わきと方と
陸奥 長門も為經子
置

堀河院乃清時百首乃奇なけ
れ時よめる 源俊親卿臣

こころなりやあき
さても月のすみのわたり
つるも月わたり
さけり
橋政前右大臣家より百首乃奇よめる
せほり 時月乃奇とて
源隆信卿臣

てぬかり月
心明く木根に花を
吹落すふりきく
の葉の風をもあに
つるも月わたり
更級山乃多き
てわたり月の
あきと風す
わきと方と
陸奥 長門も為經子
置

てぬかり月
さても月のすみのわたり
つるも月わたり
さけり
橋政前右大臣家より百首乃奇よめる
せほり 時月乃奇とて
源隆信卿臣

とてゆくのまゝ

源後莊胡氏

廿有九日
崇德院御製

玉より満波乃風をえられそ
いなりをかくと秋乃よれ有

道

大宛江上春

大炊所門左大臣

くさくさくさくさくさくさく

皇太后寔史像城

石之乃玉也

はのよきこと上
り月明をいふ
る月乃乳を
月を雪とて
あはれ

はのちうとて
心明く

あけよる我れ
月明の月乃乳を
待ねよ我れ
く文より
月うとて又
あけよる我れ
とあけよる我れ

月あまといふ

糸島法師 後志

る月乃乳をねいあ
雪乃うとていふ

月照雪うとていふ

糸島親威

はのち原あまといふ

いりわをわけくわと月乃

あけよる我れ

あけよる我れ

いひりり
あけよる

あけよる我れ

あけよる我れ

あけよる我れ

あけよる我れ

あけよる我れ

あけよる我れ

あけよる我れ

あけよる我れ

あけよる我れ

あけよる我れ

あけよる我れ

糸島親威

あけよる我れ

あけよる我れ

糸島親威

あけよる我れ

あけよる我れ

糸島親威

あけよる我れ

あけよる我れ

移月いふまゝ
あつたれ月
みゆきとわらね
ていふまゝ

しと
月乃様ねの
あつたれ

山におる集まはる
葛城乃花月也月乃志りやう
下一定家ハ代集あ奇十首乃内此一首乃力
月といふまゝ

法性寺入道お太政大臣乃家より
洞底月といふ心をよみ侍る

源信光朝臣

月乃様ねれとやあつたれ
あつたれ山の谷川乃あり

しとあつたれ

香音云秋乃福ま
あつたれとあ
あつたれとあ

あつたれとあ
あつたれとあ

あつたれとあ
あつたれとあ

あつたれとあ
あつたれとあ

山といふまゝ
あつたれとあ
あつたれとあ

千載和歌集巻第五

秋哥ト

あつたれと

大和之位

あつたれと
あつたれと

あつたれと
あつたれと

あつたれと
あつたれと

あつたれと
あつたれと

あつたれと
あつたれと

幸乃にまゝハ露やうん
 法華慈愛
 山里乃らうきやう乃まねね
 幸乃のあまねれおまゝ成けり
 後惠法師
 ようにまゝあゝむきあまねね
 幸乃はまゝはまゝあゝん
 道因法師
 夕やれさゝやねんかゝる
 幸乃ねまゝねんかゝる

法華慈愛

後惠法師

道周法師

子文

笑我改平

詞苑體云

惟宗廣言

日向守基之字
統序

長覺法師

寂蓮法師

後海子
後成子

だのふり門田はなふ秋をせり
 いまをわつとさやう乃を
 歌ふも 諸人共
 ねもろくすもさうよるれふ山奥
 人さきよりさびしうりたれ
 源兼昌
 我門乃わつとひまなふまき
 じろりり田う鴨うへんちる
 寂蓮法師
 中乃ねあさちりもふ埋れ

寂蓮法師

一種とてうゝと利田は
 あされも略の川根の
 素心思ふに立てて
 ひらねあさる
 虫乃ねえとて
 成く海牙乃素心
 ありてとけり
 秋にげ氣を
 ちと
 秋乃虫のあそび
 養乃我のふ
 こころや
 とめく
 虫のねえ
 只と

秋をすゑなれいふあう何れなる
 荻原兼宗卿に
 秋乃秋のあゝわさくれとあるものを
 わさくのふとあゝさかりとすむな
 虫をうねとつ心をよみ侍る
 左近中将良経
 とある乃何さちの原の山れねを
 あゝれいふとつ心をよみ侍る
 百首乃奇なる時よふ侍る

友近中將良經

大德門右大臣

五

すむゝゝとやんき新乃うつれを
こよひ乃月れ名うゝあるゝん
十二乃乃心をよめる
よふ人きす
秋乃月あふふをくゝささす
こよひ一をうゝゝとあるゝ
月あ拂衣とゝゝ心な
仁和寺入道江親覺性
いふやうなゝゝゝとあるゝ
月をえはゝやゝゝゝゝん

ひさしをすまふ

洛河院乃清時百首乃音聲里
 乃時拂衣乃心とよふ傳々

大納言公實

つと久選三子り持衣
乃詩あると名人共の
わく^た歌とていひく
衣をうちうらわひて
きくそんとて心
けりわれどもあり
詩あると衣を誦せり
松風乃とてふ枝
心明らば
よりあふいたる

さいほやいろうらんかゝ衣
 さぬらをもれうふあが
 源後頼朝店
 松風乃をもふ船いさひきま
 くらもろのありいぬのり
 荻原基俊
 しるしあふいふうていらか衣

是も夫よりとて
うつやとていふ
自氏文集十九回
誰家思婦秋搖帛
月苦風凄砧杵悲
八月九月正長夜
聲萬壑無時
このやとていふ
このやとていふ
砧の音の里をうね
るころとていふ
野
原の揺れをうね
るやとていふ
夕音や秋の哀を
言ふる神のぬく
夕音は秋の哀を

ちいさなうい
様者様家といふ
後威法師
このやとていふ
さとしをいふ
音乃といふ
は橋家
夕音や秋の哀を
わけの神のぬく
音乃といふ
は橋家

秋のやとていふ
夕音や秋の哀を
言ふる神のぬく
夕音は秋の哀を
秋のやとていふ
夕音や秋の哀を
言ふる神のぬく
夕音は秋の哀を
秋のやとていふ
夕音や秋の哀を
言ふる神のぬく
夕音は秋の哀を

秋のやとていふ
夕音や秋の哀を
言ふる神のぬく
夕音は秋の哀を
秋のやとていふ
夕音や秋の哀を
言ふる神のぬく
夕音は秋の哀を
秋のやとていふ
夕音や秋の哀を
言ふる神のぬく
夕音は秋の哀を
秋のやとていふ
夕音や秋の哀を
言ふる神のぬく
夕音は秋の哀を

けいふれいへさき
新撰朗詠 残菊
菊は孤叢^{コソウ}臣^シ叙代
戴霜^{イハヒテ}共^ニ立^{テリ}玉櫛^{タマキ}前
清信公の詩に「あき
より菊を霜葉の如く
しる菊乃ち花よりぞ
露を帯ぶ月よりこ
う花より花ゆれと
東の菊もこころに
ふりや後ねて
雪より花のさきとい
ひしとて解さ
るる花より花ゆれ

わが六六雪を忍びし
足ぬるに雪の端と
あまたのやうな
ちもくもくもくもく
霞もくもくもく
知ようつらに霞
ふ乃あかりと
さしわたるまじを
月うつろふも
とくよりり月のさ
えわたりをを
まつてはやくと
こくもくもくもく
毎事に秋なるれ
ハ秋なりと愁の字を

秋乃心を愁と^{おも}ひいれり
 膽聖上人雲居寺より
 第百廿合志傳より
 野風乃
 心をよめる
 春原基俊
 秋乃心をいれり
 萬れより
 万々
 乃風乃
 心をよめる
 春原基俊
 仁智後道は親覚性
 初志それより
 万々
 万々

乃強爲
油去之

六甲より
 ひきぬきぬき
 村にある所の町を
 おぼへ又ふりかへ
 るるなり
 五ヶねゆ 雪乃橋の
 秋乃々々つひにわたり
 まぬぬくまひけ
 きは河原の橋のとて
 れいりたあきき
 つひにわたり
 かろけりきとや人の
 ちうのよの者のさ

少將公重子
仁和寺

びつせりあふれくすびるおあは
 うすくうくうくうくうく
 秋のきとて後る 萩原定家
 ふれゆふも乃こすふ乃ふふ
 秋ふゆふふふふふふふ
 秋ふふふふふふふふ
 道令法師
 宇治乃お太政大臣おあはれ

うわあゝうわあゝの
山乃おぼやうの地を
まふ人さやまふ人
ま田姫いふは殿乃
尺のよさうさやまふ
人とので
うわあゝうわあゝ
おぼやうの地を
まふ人さやまふ人
ま田姫いふは殿乃
尺のよさうさやまふ
人とので

うわあゝうわあゝ
まふ人さやまふ人
ま田姫いふは殿乃
尺のよさうさやまふ
人とので
うわあゝうわあゝ
おぼやうの地を
まふ人さやまふ人
ま田姫いふは殿乃
尺のよさうさやまふ
人とので

うわあゝうわあゝの
山乃おぼやうの地を
まふ人さやまふ人
ま田姫いふは殿乃
尺のよさうさやまふ
人とので
うわあゝうわあゝ
おぼやうの地を
まふ人さやまふ人
ま田姫いふは殿乃
尺のよさうさやまふ
人とので

うわあゝうわあゝ
まふ人さやまふ人
ま田姫いふは殿乃
尺のよさうさやまふ
人とので
うわあゝうわあゝ
おぼやうの地を
まふ人さやまふ人
ま田姫いふは殿乃
尺のよさうさやまふ
人とので

山梨の奥にいて
海を渡ることも
うへ山梨の奥に
いへり
秋とていふもあまの
空の小野よりうへ
さうへ

庭乃るまよりり
九重よりみきと
いへり
禁帯を九重より
うへり
九重よりみきと
乃子河原集巻之

うへり
秋とていふもあまの
空の小野よりうへ
さうへ

近江院乃時禁庭
秋とていふもあまの
空の小野よりうへ
さうへ

秋とていふもあまの
空の小野よりうへ
さうへ

庭乃るまよりり
九重よりみきと
いへり

うへり
禁帯を九重より
うへり

乃子河原集巻之
秋とていふもあまの
空の小野よりうへ
さうへ

よめり

後めり

うへり
秋とていふもあまの
空の小野よりうへ
さうへ

庭乃るまよりり
九重よりみきと
いへり

うへり
禁帯を九重より
うへり

乃子河原集巻之

秋とていふもあまの
空の小野よりうへ
さうへ

うへり
秋とていふもあまの
空の小野よりうへ
さうへ

道周法師

庭乃るまよりり
九重よりみきと
いへり

うへり
禁帯を九重より
うへり

乃子河原集巻之
秋とていふもあまの
空の小野よりうへ
さうへ

秋とていふもあまの
空の小野よりうへ
さうへ

うへり
禁帯を九重より
うへり

乃子河原集巻之
秋とていふもあまの
空の小野よりうへ
さうへ

秋とていふもあまの
空の小野よりうへ
さうへ

後めり

三田よりいり里ハ
麓乃里ハ家のしを
くれと嵐乃竹を
吹さうてお祭を
しるさく

あきやうともう原
作よりあきやう
すれ乃あきやう
あきやうあきやう
舟の心い明く
さうねねう風の
ねねのさうさ
さうと常盤あき
ねさうあきさう
さうさう

三田やまよりいり里ハさうね
りー乃はさうさうさうさう

聖武成保 福成三
片里

あきやうともう原
作よりあきやう
さうさうあきやう
さうさうあきやう

松岡茂家といふさうさう

藤原朝神 散後宗貴子
木乃朝宗

さうねねうさうさうさう
さうさうさうさうさう
ねねあきさうさうさう

惟宗茂家

みん 志

あきやうともう原
作よりあきやう

さうねねう風の
ねねのさうさ
さうと常盤あき
ねさうあきさう
さうさう

あきやうともう原
作よりあきやう
さうさうあきやう
さうさうあきやう

さうねねうさうさうさう
さうさうさうさうさう
ねねあきさうさうさう

松岡茂家といふさうさう

あきやうともう原
作よりあきやう
さうさうあきやう
さうさうあきやう

源後朝神

あきやうともう原
作よりあきやう
さうさうあきやう
さうさうあきやう

百首乃舟よさうさうさう
さうさうさうさう
さうさうさうさう

ちりあたる谷のそり
まの葉のちりゆふ
のふりもふたへお葉
やもれすあふんと
時あふねをうむるよ
めれこ

それくゆ秋止
心通

りちあたるちりり
秋もあふすこ
ころもあふす
ころもあふす

ちりあたる谷のそり
まの葉のちりゆふ
のふりもふたへお葉
やもれすあふんと

後二条内大臣
金葉集

それくゆ秋止
心通

百首乃奇古々時九月事のふ

よもせねる 崇徳院御製

りちあたるちりり
秋もあふすこ
ころもあふす
ころもあふす

ちりあたる谷のそり
まの葉のちりゆふ
のふりもふたへお葉
やもれすあふんと

それくゆ秋止
心通

りちあたるちりり
秋もあふすこ
ころもあふす
ころもあふす

ちりあたる谷のそり
まの葉のちりゆふ
のふりもふたへお葉
やもれすあふんと

山寺秋書といふ心よのちり
お大僧の覚忠

りちあたるちりり
秋もあふすこ
ころもあふす
ころもあふす

金三坊々々九月事のふ

ちりあたる谷のそり
まの葉のちりゆふ
のふりもふたへお葉
やもれすあふんと

ちりあたる谷のそり
まの葉のちりゆふ
のふりもふたへお葉
やもれすあふんと

紀康宗
 雅樂允
 何うき方ねさめよる。とれいこう
 ろくもひとれ社ねーりれ
 萬葉の心と候。 在原盛雅
 ちりといふのらさん風をいふま
 もみりとすける。やましくりごと
 中納言定頼世そのなくね山田信光
 々此きし估る。 中納言定頼母 芳照聖教王女
 子やこいゝさひーはあさる。本枯ろ
 最乃まうせおひいさうやま

上仇雅堂先生
雅樂允

存原國雅

ちるをいづのちをいふ
もみちをいふ

中納言定頼世をのほくは
白糸橋

多此佈
中納實定

予やこゝろさびししちやまゝる本枯る
憂乃まゐるせおひいさうやまこ

人 大

中納言定賴

あゝそれわさる川あま

塔院乃清時百首乃并

時勢特々上り
為原仲實

やうなるものゝ驚を引くと
うゝうゝとを切りくつ

隆源法師

金葉德之
山乃志利

[illegible]

乃何んぞあまの
 上乃白きとやと宮院の
 大御妹野とていふ
 多きや宮院大御女
 なる宮よりとていふ
 八雲おき山よりとていふ
 山乃とていふとていふ
 八雲の山の片よりとていふ
 多きの山よりとていふ
 とていふに多きとていふ
 乃何んぞあまの

にさなりすのよとていふ
 源後頼朝長
 夕たれ山よりとていふ
 乃何んぞあまの
 東宮傳也兼官也職負合傳一人掌以經奉詔
 傳大納言道細家乃奇合よりとていふ
 とていふ
 乃何んぞあまの
 乃何んぞあまの
 乃何んぞあまの

乃何んぞあまの
 上乃白きとやと宮院の
 大御妹野とていふ
 多きや宮院大御女
 なる宮よりとていふ
 八雲おき山よりとていふ
 山乃とていふとていふ
 八雲の山の片よりとていふ
 多きの山よりとていふ
 とていふに多きとていふ
 乃何んぞあまの

にさなりすのよとていふ
 源後頼朝長
 夕たれ山よりとていふ
 乃何んぞあまの
 東宮傳也兼官也職負合傳一人掌以經奉詔
 傳大納言道細家乃奇合よりとていふ
 とていふ
 乃何んぞあまの
 乃何んぞあまの
 乃何んぞあまの

おさうて休む
も居ぬ 杉は小
おしちうとて
さきまに明ぬ
後く樹の鳴こ
おれ乃新波の
音乃種とて
うへーと鳴く
かきやうとけの
拾遺をさすね
さくまけいとう
う拂いのあてに
やうらんそと本
るもめきいとい
たりさうははれ

おさうてくはるも居ぬの宿を
けけやうとてやうり鳴
おさ成保 お
霜乃新波の音れめくと
あうとてさうとて
あさとてさう 源親房 金葉作者
本名弘康
かきやうとて毛乃霜と拂
さうね乃と乃とさうとて
歌とて 紫式部 ははれ
氷をさうとてやうとて

氷をさうとてや
ははれ母のけい
観念とて
あさ乃とての
おしちうとて
さきまに明ぬ
後く樹の鳴こ
おれ乃新波の
音乃種とて
うへーと鳴く
かきやうとけの
拾遺をさすね
さくまけいとう
う拂いのあてに
やうらんそと本
るもめきいとい
たりさうははれ

わさうとてさうとて
源川院乃時百骨乃骨なり
うとてさうとて
あさ乃とての
おしちうとて
さきまに明ぬ
後く樹の鳴こ
おれ乃新波の
音乃種とて
うへーと鳴く
かきやうとけの
拾遺をさすね
さくまけいとう
う拂いのあてに
やうらんそと本
るもめきいとい
たりさうははれ

おさ大まに

あふしうへにを
 西の山をへ
 市初結 礼記月令
 十月初候 木始氷
 とありしものなり
 冬陽池 梅はさ
 乃意の明く鶯の
 すみけ 居ぬ故に
 お乃居るものなり
 鴨乃ぬへに乃
 鴨乃まねるものなり
 いふれ枯くもさ
 ともさきいふも

あふしうへにを
 西の山をへ
 市初結 ハナツクシとつるものなり
 冬陽池 梅はさ
 乃意の明く鶯の
 すみけ 居ぬ故に
 お乃居るものなり
 鴨乃ぬへに乃
 鴨乃まねるものなり
 いふれ枯くもさ
 ともさきいふも

推中納言 經房
乃中女之房子

道因法師

あふしうへにを
 西の山をへ
 市初結 礼記月令
 十月初候 木始氷
 とありしものなり
 冬陽池 梅はさ
 乃意の明く鶯の
 すみけ 居ぬ故に
 お乃居るものなり
 鴨乃ぬへに乃
 鴨乃まねるものなり
 いふれ枯くもさ
 ともさきいふも

あふしうへにを
 西の山をへ
 市初結 ハナツクシとつるものなり
 冬陽池 梅はさ
 乃意の明く鶯の
 すみけ 居ぬ故に
 お乃居るものなり
 鴨乃ぬへに乃
 鴨乃まねるものなり
 いふれ枯くもさ
 ともさきいふも

平實寺
金葉集

平實寺
乃中女之房子

くさくさ風情より
 がきみれゝ歳下
 さゆいれまふれ松を
 きて独縁の松を
 愛のきまふらに
 船戸にけりてさう
 心山家の雪れ船
 楫乃彦の松を
 こそ雪のすけり
 ねさひいゝ風情
 あふふ
 我をこめて谷の松
 谷乃戸の雪風は
 雪も降やせん松の
 気色さひやふや

さゆいれまふれ松を
 こそ雪のすけり
 ねさひいゝ風情
 あふふ
 我をこめて谷の松
 谷乃戸の雪風は
 雪も降やせん松の
 気色さひやふや

大朝書經信

ふみ 十一

さしわゝる松の
 な今午のつら
 雪の松の
 こそ雪の
 ねさひいゝ風情
 あふふ
 我をこめて谷の松
 谷乃戸の雪風は
 雪も降やせん松の
 気色さひやふや

さしわゝる松の
 な今午のつら
 雪の松の
 こそ雪の
 ねさひいゝ風情
 あふふ
 我をこめて谷の松
 谷乃戸の雪風は
 雪も降やせん松の
 気色さひやふや

松原孝通朝臣

松原清浦朝臣

おくれ乃よりこの
 朗詠云不_ス是_ニ松_ニ中_ニ偏_ニ
 也_ト此_ニ松_ニ用_ニ後_ニ又_ニ
 雪_ニた_ニこの_ニ松_ニを_ニけ
 一_ニ菊_ニ乃_ニの_ニち_ニ乃_ニ
 花_ニ乃_ニ乃_ニと_ニ乃_ニ花_ニ

おくれ乃よりこの
 朗詠云不_ス是_ニ松_ニ中_ニ偏_ニ
 也_ト此_ニ松_ニ用_ニ後_ニ又_ニ
 雪_ニた_ニこの_ニ松_ニを_ニけ
 一_ニ菊_ニ乃_ニの_ニち_ニ乃_ニ
 花_ニ乃_ニ乃_ニと_ニ乃_ニ花_ニ

藤原資隆朝臣

雪はもみねの雪
波乃々雪はもみ
乃乃々雪はもみ
雪はもみねの雪
波乃々雪はもみ
乃乃々雪はもみ
雪はもみねの雪
波乃々雪はもみ
乃乃々雪はもみ

雪はもみねの雪
波乃々雪はもみ
乃乃々雪はもみ
雪はもみねの雪
波乃々雪はもみ
乃乃々雪はもみ
雪はもみねの雪
波乃々雪はもみ
乃乃々雪はもみ

大正 實定

雪はもみねの雪
波乃々雪はもみ
乃乃々雪はもみ
雪はもみねの雪
波乃々雪はもみ
乃乃々雪はもみ
雪はもみねの雪
波乃々雪はもみ
乃乃々雪はもみ

雪はもみねの雪
波乃々雪はもみ
乃乃々雪はもみ
雪はもみねの雪
波乃々雪はもみ
乃乃々雪はもみ
雪はもみねの雪
波乃々雪はもみ
乃乃々雪はもみ

大正 實定

よき世傳々々時雲の音。くよ
や
蘇原良清 を助龍助
子
大長旅官少進

少きすゝあゝ乃山とえわを
 おのゝをこゆる志を乃うゝあ
 醍醐乃清洲のやゝ乃よ并合志傳り

醍醐乃法郎の社

少雪なり新糖乃竹も埋れ
 なりなりきりきりきりきり
 新糖雪といふ雪よりなり
 西住法師 張右季政

十六

[illegible]

兼國乃かしこに我ありしはも、年月をさうり
ひつとほつらんを、一ねをとりぬ、一を
け、其本よりちつてや、り年いれちんとあり、都せく、いそむ
こ、うき、一年を、用中、う、い、と、さ、り、さ、い、よ、ち、つ、て、い、わ、れ、ん、と、や、す
らん、その、や、用中、ま、ま、こ、り、の、さ、う、い、れ、つ、か、ち、い、な、つ、つ、

